

説 林

牢獄及び狴犴の起源に

就いての臆説

附、猛獸及び毒蟲神判の痕跡

白 鳥 清

一

嘗て余輩は、「古代支那に於ける神判の一型式」と題して、周の古傳説を解釋し、其の傳説中に、動物神判(animal ordeal)といふ習俗が反映してゐることを説き、學界に卓見を提供して置いたが、其後更に古

牢獄及び狴犴の起源に就いての臆説

代支那思想研究の結果、單に周の古傳説のみならず、他にもまた動物神判物語として、獬豸神判物語なるものあるに氣付き、之れに關して「支那法の起源」と題して説明をなし、此の獬豸なるものは、實在的動物とは考へられないが、古代支那人が、善惡正邪を判定するに、獬豸といふ動物を以てしたといふ物語を研究すると、その物語の裏面に、動物神判の思想が伏在して居り、また動物神判に使用される動物は、神視され靈視されるので、其の結果非現實的な、不可解な獬豸といふ動物が案出されるに至つたのであると論じ、更に其の思想が「法」なる文字の構成素因をなしてゐることを立證したことがあつた。⁽²⁾

處で茲に prison の意味を有つ牢獄といふ文字が

ある。從來學者によつて、此の牢獄といふ觀念に、文字構造の點より、起源的説明を加へられたる者あるを聞かないが、牢獄と言へば、神判や、法の思想と、密接不離の關係にあると思惟されるから、以下尠しくこれに就いて論究して見ようと思ふ。

二.

支那の上代に五刑の存してゐたことは、古典籍の諸書に記され、従つて各人の熟知する處で、敢て引例の必要も無からうが、試みに一例を掲げるなら、司馬遷の史記五帝本紀に、

舜曰、皐陶蠻夷猾夏、寇賊姦軌、汝作士、五刑有服。

とあり、此處の五刑に馬融は註して、

五刑、墨、劓、剕、宮、大辟。

と言ひ、正義には更に詳しく、

按墨點黥其額、涅以墨、劓截鼻也、剕刖足也、宮淫

刑也、男子割勢、婦人幽閉也、大辟死刑也。

と言つて居る如きは即ちそれである。

此等五刑の外に、遠地に流すこと即ち流刑と、科料を出して罪をあがなはしむること即ち贖刑と、鞭を以て打つこと即ち鞭と、朴を以て打つこと即ち笞刑の四刑を加へて古來九刑とも稱してゐた。

前述の五刑や九刑の中には、置牢とか入獄などいふ刑罰の種類は見當らないが、古典にまた、入獄・斷獄・決獄・訟獄・典獄・獄吏・獄市・獄法などいふ文字の散見する處から察すると、罪人を獄するといふ刑罰の方法は、罪人を取扱ふ風習として、古くより支那に存在してゐたと見られる

周禮、秋官、大司寇の條に、

以圜土聚教罷民、凡害人者實之圜土而施職事焉。

とあり、註に「圜土は獄城なり」と見える文などを參照すると、置牢入獄の風習が、古代の支那社會に存在したことは否定し能はざることゝ考へられる。

いま「獄」字用法の例として、秦漢頃の文例の二三

を示すと、獄吏について、史記、周勃世家(卷五七)に、

文帝既見絳侯獄辭、乃謝曰、吏事方驗而出之、於是使使持節赦絳侯復爵邑、絳侯既出、曰、吾嘗將百萬軍、然安知獄吏之貴。

とあり、獄市に就いて、漢書、蕭何曹參傳(卷三九)に、

吾且入相、居無何、使者果召參、參去、屬其後相曰、以齊獄市爲寄、慎勿擾也、後相曰、治無大於此者乎、參曰、不然、夫獄市者所以并容也、今君擾之、姦人安所容乎、吾是以先之。

とあり、獄法に就いて、漢書、魏相丙吉傳(卷七四)に、

吉本起獄法小吏、後學詩禮、皆通大義。

となり、獄卒に就いて、後漢書、廉范傳(卷六一)に、

隴西太守鄧融、備禮謁范爲功曹、會融爲州所舉案范知事譴難解、欲以權相濟、乃託病求去、融不達其意大恨之、范於是東至洛陽、變名姓、求代廷尉獄卒、居無幾融果徵下獄、范衛侍左右盡心勸

勞。

とあるが、此等の文例より之れを判斷すれば、今日吾吾が了解してゐる牢獄、監獄、獄訟など、使用されてゐる獄字の意味と大差なきものゝやうであり、

牢字用法の文例についても史記、天官書(卷二七)に、

有句園十五星、屬杓、曰賤人之牢、其牢中、星實則囚多、虛則開出。

とあり、更に同じく天官書に、

赤帝行德、天牢爲之空。

とあり、註に、

赤帝行德、夏陽主舒散、故天牢爲之空、則人主當赦過、宥罪者也。

と見え、漢、焦延壽撰・易林(卷六)に、

桎梏拘獲身入牢獄、髡刑受法終不得釋耳。

とあるが、此等の文例でもまた牢字が獄字の意と同じく、監獄とか牢獄とかの義と殆ど變らないものゝ

やうである。

其外にまた、牢獄とが監獄とかと同意義に用ひられた語に、狴犴といふ熟語がある。辭源の狴犴の條に、

狴犴曰牢、言監獄也。

とあり、或は明、陳仁錫の潛確居類書に、

狴犴好訟、形獄門上。

とある如き例はそれであるが、古く漢、焦延壽の易林に

失意懷憂、如幽狴牢。

とある如きも、狴犴の狴字を獄牢の牢字と結び付け、之れを狴牢と熟語して牢獄の義に使用して居るのであり、更に荀子、宥坐篇に、

獄犴不治、不可刑也。

とある如きは、牢獄の獄字と、狴犴の犴字とを結び付け、之れを獄犴と熟語して監獄の意に使用して居るのである。

三

擬て、監獄の義を有する牢獄にせよ、或は狴犴にせよ、それ等の文字を一見したゞけでそれが何れも牛とか犬とかいふ動物に關連してゐる文字であることが解るが、抑もこれ等動物に關連してゐる文字が、監獄の意味に使用さるゝに至つた思想の起源には、如何なる理由が存在したのであらうか。

嘗て余輩は、周の始祖后稷の誕生傳説として、史記の周本紀に、

姜原出野見巨人蹟、心欣然說欲踐之、而身動如孕者、居期而生子、以爲不祥、棄之隘巷、馬牛過者皆辟不踐、徙置之林中、適會山林多人、遷之而棄渠中氷上、飛鳥以其翼覆薦之、姜原以爲神、遂收養長之。

とある記載を引用し、此の文中で、不祥視された生兒を隘巷に棄てた處、牛馬も之れを踐殺しなかつたと

いふ句に意義ありと爲し、その詳論を試み、亞細亞諸民族の中で、特に高句麗や扶餘や蒙古民族などの類例と比較研究をなし、それは一種の動物神判といふ風習を反映してゐる文獻であると論述し、更に后稷誕生傳説の續きとして、生兒を林中に置いたり、或は冰上に置いたりすることは、何れも生兒后稷が、天資偉大なる人物なるや否やを^{そま}する思想であると考えしたのであつたが、今日と雖も猶ほ、當時の考へを變更する必要を認めないのである。

それで、前述の如く、牢獄とか、狴犴とかいふものが、支那に於いて既に早く、現今吾々が了解して居る如き監獄とか刑務所とかの義に使用されてゐたとすれば、此等の文字が構成された當時に遡つて、心理的の説明を施すと、牢獄又は狴犴が監獄の意義を有するに至つた其の根柢には、古代の支那人の間に、周の後稷傳説で解釋したやうな、動物神判といふ風俗が慣行されてゐた結果、動物に關連してゐる牢獄又は

狴犴などいふ文字を神判即ち *ordeal* と密接な關係ある「監獄」の意に使用するに至つたのではなからうかといふ臆見が浮んで來るのである。説文によつて牢の字を検すると、

𤝵 閑也、養牛馬圈也。

とあり、其の註に、

充人註曰、牢閑也、必有閑者、防禽獸觸鬻、牲繫於牢、故牲謂之牢、如柴誓呼牛馬爲牯、禮呼牲爲牽也。

とあるので知られる如く、牢は閑であることに間違ひは無いし、閑はまた圈であることを知つて、茲に想起されることは、論衡、吉驗篇に見える秦離國の始祖傳説に、

北夷秦離國王侍婢有娠、王欲殺之、婢對曰、有氣大如雞子、從天而下、我故有娠、後產子、捐於猪溷中、猪以口氣噓之不死、後徙置馬欄中、欲使馬藉殺之、馬復以口氣噓之不死、王疑以爲天子。

とある記載や、三國志、魏書（卷三〇）に引用せる魏略に、

昔北方有橐離之國者、其王者侍婢有身。王欲殺之、婢言、有氣如雞子來下、我故有身、後生子、王捐之於澗中、猪以喙噓之、徙至馬閑、馬以氣噓之不死、王疑以天子也。

とある文句である。

此等の文に據つて見ると、猪の圈を稱する時は澗と言ひ、馬の場合は欄とか閑とか言つてゐるのであるが、説文の引用文で分る如く牢は閑であり、閑は牛馬を養ふ圈であるならば、牛圈をも閑と云ひ、猪圈を澗と云つたに對しては牛圈を牢とも稱したのであらうと想はれるし、澗や閑や欄に生兒を置いて、或は豕を以て、或は馬を以て、天資の如何を^{すま}する風習の存在したことが肯定されるならば、之れに對應して、牢や閑に生兒を實き、牛を以て、其の生兒の未來を卜する風習も存在したのであらうことが考へられる筈で

ある。

此の想像は、單に橐離國の始祖傳說や、周の後稷の誕生傳說のみでなく、更に鰐魚を以て罪科の有無を判定せしめてゐる例や、⁽³⁾猛獸を以て行爲の善惡を判斷せしめてゐる例や、⁽³⁾巨象白象を以て正邪を識別せしめてゐる例などが、⁽³⁾亞細亞南方の諸民族間に存してゐたこと、或は墨子の明鬼篇中に、羊を以て原被兩造の罪過の有無を審判せしめてゐる例の存するを知るに及んで、一層確實性を有つに至るのであり、更に三國志（卷三〇）扶餘傳に、

有軍事亦祭天、殺牛觀蹄、以占吉凶、蹄解者爲凶、合者爲吉。

とある記載などを参照すると、牛も亦神占に使用された動物であることが了解され、從つて「牢」即ち牛圈中の牛は、人物の如何を^{すま}する風習として、神占と密接なる關係をもつ神判にも適用されたことがあつたと考へても、強ち無理とは思はれない。

次ぎに、牢獄の獄字に就いて検討して見ると、説文獄字の條に、

獄确也、召南傳曰、獄圉也、圉同确、堅剛相持之意、从𡗗从言、二犬所目守也。

とあり、段玉裁註に、

說从𡗗之意、詩曰、宜玃 宜獄、卿亭之繫曰玃、朝廷曰獄、獄字从𡗗者取相爭之意、許云所以守者、謂陸牢拘罪之處。

とある。

此等の文に據ると、獄字が二犬を含んでゐる理由に就いて、許慎は、「二犬所目守也」と言ひ、段玉裁は、許慎の説を揣摩臆測して、「許云所以守者、謂陸牢拘罪之處」と解してゐるが、これを二犬を以て監守の役をなさしむるものと考へるから、罪人を犬に監守せしめてゐた牢獄の意だと言ふことになるのである。

牢獄及び玃玃の起源に就いての臆説

併し一方に於いて、許慎は、「从𡗗之意」について、獄字を「堅剛相持之意」と解し、段氏も「相爭之意」と考へてゐるが、若し相爭之意とか、堅剛相持之意とかに解するならば、二犬を以て、原被兩造之爭鬪を暗示するものと見られ、それは神判や裁判に、二犬を使用して以て罪科の有無を決定した風習の反映した文字となつて來る。かくの如く同一文字「獄」の説明に、二様の解釋をなしてゐるといふのは、許慎も段玉裁も共に獄字について、正確な解釋を有つてゐなかつたことを示すものである。況んや獄字には二犬のみではなく、「言」字が含まれてゐるのであるから此の「言」字に言及して立論することを忘れてゐるのは、其の論が不確實な起源論と非難されても辨解の辭がないであらう。それ故に獄字の説明としては、構成要素としての「二犬」と「言」との結合を、合理的に解釋して初めて妥當な説明と首肯されるのではなからうかと思ふ。

そこで先づ獄と同様獸偏なるも、構成要素に「言」字の無い狴犴に就いて考察して見ることにする。狴犴が獄と同義に用ひられてゐるのは、先きに掲げた荀子の宥坐篇に、

獄犴不治、不可刑也。

とある何でも解るが、楊倞は更に註して、

犴亦獄也、詩曰、宜犴宜獄、獄字從二犬、象所以守者、犴胡地野犬、亦善守、故獄謂之犴也。

と言ひ、明らかに犴も亦獄なりと言つて居る。

楊子方言、吾子篇に、

劔客論曰、劔可以愛身、曰、狴犴使人多禮乎。

とあり、宋咸注に、

狴犴牢獄也、擊劔可衛身、則囹圄之中、囚者多恭、豈使人多禮乎。

とあり、狴犴と牢獄とを同一に考へてゐることが解る。而して先きに掲げた説文段氏の註に、「郷亭之繫を犴と言ひ、朝廷の（繫を）獄と言ふ」となし、地方と

朝廷とによつて、其の稱呼を異にしてゐたことを述べてゐるが、これも亦、犴と獄とを共に牢獄であるとして居ることには變りは無い。

扱て、上掲の例證によつて、犴が獄と同義に用ひられ、狴犴はまた牢獄の意を有することが分つたとしても、何故に狴犴を以て牢獄に當てたのであらうかの説明は未だ爲されてゐない。

狴犴の犴は楊倞が荀子に註してゐる如く、胡地の野犬であることは、史記、司馬相如傳（卷一一七）に獬豸の文字があり、これの註に漢書音義を引用して、

獬胡地野犬、似狐而小也。

とあるのでも知られるやうに、其の野犬であることには誤はなからうが、此の野犬をして牢獄を守護せしめたことが起因となつて、狴犴を牢獄の意に慣用するに至つたと解釋する楊倞の説明は、正確なる説明と見ることが出来るだらうか。楊倞は、「犴胡地野犬、亦善守、故獄謂之犴也」と言ひ、犬の善守の性質に

struts を置いて居るが、善く守る性質があるからとて、また此の性質を利用して牢獄を守らしめたることが想像されるとしても、此の犴を牢獄の意味に使用するに至つたと説明するのは、自分には正しいとは考へられなく、寧ろ牽強附會の説のやうに思はれてならない。

同様に、「犬」を構成要素にもつ獄字が、牢獄の意に使用された理由として、許慎の如く、「二犬所目守也」と言ひ、犬を以て牢獄を守らしめた慣習の存在を想像して、獄字が prison の意に使用されたと説明しても、これまた未熟の説明であるといふ感がするものであり、第一兩犬の中間に挿入されてゐる「言」字が、文字構成の素因となつてゐることについて解説して居らないことに缺陷があるやうに思はれる。

然らば犴とか獄とかの文字が、何故に牢獄の意味に使用されるやうになつたかといふ疑問に對して、適當な起源論的な説明がなし得られるかと言へば、

牢獄及び犴犴の起源に就いての臆説

罪科の有無を判定するに神判風習の存在した當時、動物神判の一種である犬神判なるものが行はれ、容疑者を犬を畜養せる屋舎に入れて嚙み附かせ、以て眞の罪人を發見したといふことがあり、次いでそのことは、刑罰の一種として、罪人を犬舎に入れるといふ慣習に變化し、此の風習が起源となつて、罪人を收容する屋舎をも、犬に關係ある文字の「犴」とか「獄」とかを prison の意に使用するに至つたのではなからうかと思ふ。

元來犬は善守の性質あり、爲めにそれが實用に供せられるのであるが、同時にまた頗る嗅覺が發達してゐて、ものを探知する性能をも有つてゐる動物なることは周知の事實で、此の性能あるが故に、犯罪行為の有無をも感知判定することが出來ると、一般に考へられるに至つたのである。

いま未開民族が、神判の場合に、犬を適用してゐるのを見ると、Lévy Bruhl の Primitive Mentality

(P. 233) 』

"Most tribes have a milder concoction for trivial offences", says Macdonald. "The drug may be taken by proxy—it may be administered to a dog or a fowl or some animal representing the accused."

In these cases the animal is tied by a string to the criminal" (undoubtedly so that their physical participation in each other may be brought about).

と、未開民族一般の動物神判の慣習を叙述し、更に或る種の部族の例として、

The Wagogo, too, "in trivial cases allow the *muavi* to be tested, not on the accused himself, but on a hen, which he is obliged to hold." In the upper Niger, "Murder and theft are punishable by death, adultery by a heavy fine,

Confiscation of property, or slavery, whilst

drinking of sassawood water is imposed on persons accused of lying or stealing. It is not uncommon, however, to allow substitutes to partake of this poisoned water, and persons are procurable who are acquainted with an antidote, and therefore take the poison with impunity. Dogs are even allowed to be used as substitutes, but, should they die the owner has to pay a heavy fine being deemed guilty."

とある如きは、容疑者を大舎に入れて test するところ例ではなから、被告の代理としての犬に毒藥を飲ませ、徴候の如何によつて、罪料の有無を判定するのであるから、大神判の例として參考に供せらるゝものである。

更に神判の一種と觀せらるゝ誓盟に、犬を使用しつゝる例は、通古斯民族間に見られる。

Westermarck *On The Origin and Development of Moral Idea* (Vol. II. P. 118-119) ㄴ

The Tunguses regard it as the most dreadful of all their oaths when an accused person is compelled to drink some of the blood of a dog which, after its throat has been cut, or has its flesh scattered about piece meal, and to swear—"I speak the truth, and that is as true as it is that I drink this blood. If I lie, let me perish, burn, or be dried up like this dog."

とあるのがそれで、此の場合は、犬を殺し、其の血液を飲んで誓盟をなし、自分の爲した行爲の善なることを保證してゐるのであるから、犬神判の一形式と見て差支はない。

また、Assam の Nager 部族間でも、誓盟に犬を使用してゐたことは、*Encyclopaedia of Religion*

牢獄及び狴犴の起源に就くこの臆説

and *Ethics* (Vol. 9. P. 431) ㄴ

Another method of the Nager of Assam (involving a mutual oath) is for the two men to hold a dog which is chopped in two; this is emblematic of the fate which will befall the perjurer.

とある例でも解る。

上掲の犬神判、犬誓盟などの例が諸部族間に存在してゐる處から察すると、支那に於いても、縦し其の形式は異なるとも、同様犬神判や、犬誓盟などいふ慣習があつてもいゝ筈であると考へられる。斯くして自分は、獄とか、犴とかいふ文字は、犬神判、犬誓盟などいふ習俗の慣行されてゐる當時、構成された名残の文字と觀じたいのである。

支那に於ける獄字が、段玉裁の説文註に言ふ如く、「獄字从狀者、取相爭之意」であるとすれば、爭訴に關與する二犬は、夫れ夫れ、原被兩造を代表してゐるや

うに思はれ、従つて此の文字は相互神判 (mutual ordeal) に於いて、原被兩造所屬の犬に、毒を飲ましめ、或は死といふ現象により、或は他の徴候によつて、罪の有無を判定したといふ風習の反映した文字とも思惟されさうであるが、別にまた、嗅覺の發達した犬を靈視使用した大神判風習の名残の文字とも考察されさうでもある。此の嗅覺を利用した神判とは即ち犬舎に容疑者を入れて犬をして罪の有無を判定せしめるそれを言ふのである。

獄字に「二犬」が含まれてゐるので、大神判の行はれてゐた當時の慣習をそれに反映してゐると觀じたが、更に獄字に神判の要素を認めらるゝと想はれるのは、二犬の中間に、「言」字が介在してゐること、これは恐らく、犬神判に立合ふ權威者が、神判の結果を、「神の言」として、原被兩造に宣告する風習を、文字に示したと見ることが出来る。墨子の明鬼篇に物語られてゐる羊神判で、神判の結果を、神社の

祓が原被兩造に宣告してゐる例を参照し、また周禮秋官、大司寇の條に、大盟約の場合には、司盟者が必ずこれに臨むといふことあるに思ひ及ぶと、此の推定は必ずしも不合理ではなく、寧ろ妥當な解釋と考へられさうである。

五

獄字に對比して検討すべき文字は告字である。牢獄の獄字に大神判の名残を認めることが出来るとしても、牢字に牛神判の反映せることは強調し得られず、他部族間の例として、瀾や閑に生兒を置き、以て其の生兒の資質を^{まも}つた例證から、僅かに牢も亦牛舎として牛神判に使用されたらうと推測したのであるが、此の告字に至つては、牢字に比して更に強く牛神判の要素が認められるのである。

説文、告字の條に、許慎は、

告、牛觸人、角著横木、所目告人也、从口从牛。

と言つて居り、段玉裁は、此の許氏の説を反駁して、如許説則告即楯衡也、於牛之角寓人之口爲會意、然牛與人口非一體、牛口爲文、未見告義、且字形中無木、則告意未繇、且如所云、是未嘗用口、是告可不用口也、何以爲一切告字見義哉、愚謂此許因童牛之告而曲爲之說、非字意。

と云つて居り、更に自説として、

此字當入口部、从口牛聲、牛可入聲讀玉也、廣韻告上曰告、發下曰誥、古沃切三部音轉古到切、又汪氏龍曰、此因孺字、故立告部、愚謂誠然、孺从毀省、毀亦教也、教之故急告之告亦聲、然則當立毀部、孺屬焉、不當有告部。

と論じてゐる。

余輩は許慎の説に對しても、段氏の論に對しても、全體として之れに賛意を表する能はざる者である。

段氏が許慎の説を論駁してゐる一節に、「於牛之角寓人之口爲會意、然牛與人口非一體、牛口爲文、未見告

字獄及び雅杆の起源に就いての臆説

義」といふのが、あるが、勿論牛と人口とは段氏の云ふ如く一體ではなく、それを一體たらしめようと考へるのが誤りで、一體でない牛の角と、人口とを以て混合構成された處に、告字の眞の姿が認められるので、前に獄字は「二犬」と「言」との合成字であると解釋した如く、此の告字もまた、牛と口、即ち牛の角と人間の口との合成字であると思ふのである。これは獄字構成の心理を解説した時と同様に、若し牛を以て善惡を判定する所謂牛神判の風習が存してゐたとすれば、此の場合、必ず何人か立合ひ、牛に依つて示現された徴候を判斷して、其の是非を決定するのが自然である。だから告字に示されてゐる口は牛の口を意味してゐるのではなく、立合つた權威者即ち徴候によつて原被兩造に宣告する者の口と見なければならぬ。許慎はまた、「角者橫木、所曰告人也。」と云つて居るので解る如く、縦し「口」は段氏が許説を敷衍して説いてゐるやうに人の口を寓して會意となして

ゐるとしても、告げるといふ點に重きを置き、内心では牛口を以て人に告げると解釋してゐるやうに見えるので、此の點が間違つてゐると思ふ。

道德思想や、刑罰觀念發達の道程に於いて、人々は未開時代に於いても、善惡正邪を識別するに、一定の標準となる可き方法を案出するを常とする。誓盟 (oath) とか占ト (divination)、神判 (ordal) 等の手段に訴へるのは即ちそれである。此等誓盟の場合、誓者が猛獸の皮上で誓ひ、盟者は動物の血液を飲んで盟をなし、また占トの場合には羊骨や牛骨を使用して占ふといふことをもなすので、斯る例は東西の諸民族間に見られる現象であるが、神判の場合には、生きてゐる動物を適用して神判としてゐるものもあるので、周の後稷傳説に見える牛羊神判、墨子の明鬼篇に見える神羊神判、⁽¹¹⁾ 古籍籍に見える解豸神判、⁽¹²⁾ 秦離國王誕生の物語に見える豕馬神判などは、既に動物神判の類例として、余輩の論究したものである

⁽¹³⁾ が、更に猛獸を使用して神判をなしてゐる多くの例を亞細亞南方諸民族間に發見することが出来るのである。

上記のやうな動物神判の例證を參照すると、古代の支那に於いて、牛を以て正邪を見分けた牛神判が行はれてゐたと考へても差支へがなく、殊にアジャ南方諸民族の動物神判の例には、必ず shaman 階級の僧侶が關與してゐたことを知ると、若しも告字を牛神判の名殘の文字と見て誤りがなければ、告字の構成要素は牛と人口即ち shaman 階級の權威者の口とであると推測しても無理はなからうと思はれる。

斯くの如く考察し來ると、獄と告とは、心理上頗る共通な點を持つてゐるので、獄が、犬を以て善惡を判斷させ、其の結果をば其處に立合つた權威者とか、shaman とかをして、原被兩造に宣言せしむる意を含んでゐる文字であるとするならば、告は牛を以て

正邪を判定させ、其の結果を、同じく權威者の口をして兩造に宣告せしむる義を藏してゐる文字であると思ふことが出来るのである。とすれば牛神判より發展した prison を指して言ふ時は牢告と言ひ、犬神判より發達した prison を指して言ふ場合は狂獄といふのが、最も適當してゐる文字の使用法ではなからうか。

此の牛といふ動物も犬と同様、神判や誓盟に使用されたとすれば、それは夫れ等の動物が神聖靈視された結果であつて、此の神聖靈視の動物が神判や誓盟に使用されるといふことは普遍的現象であるを思へば、牛を神判や誓盟に使用した例證は、當然他民族間にも求め得られる筈である。また二三の例を示すと、Waddell, *The Buddhism of Tibet*. (p. 569) に

And in the courts when the great oath is taken, which is seldom, it is done by the person placing a holy scripture on his head, and

sitting on the reeking hide of an ox and eating a part of the ox's heart. The expense of this ceremony is borne by the party who challenges the accused.

とあるのは西藏に於いて、大盟に牛を使用してゐる例であるが、これはまた唐代の西藏の風習にも見られるもので、

唐書、吐蕃傳(卷二一六)に、

贊普與其臣歲一小盟、用大猴爲牲、三歲一大盟、夜肴諸墳、用人馬牛驢爲牲、凡牲必折足裂腸陳干前、使巫告神曰、渝盟者有如牲。

とあるので夫れを知ることが出来る。

前者の例は、生々しき牛皮の上に坐し、牛の心臓の一部を食し乍ら盟をなすのであるが、後者の例では、人馬牛驢犬猴などいふ動物が適用されてゐ、それ等の動物は、折足裂腸の姿に於いて殺戮され、巫をして神に告げしめ、「若し汝等にして僞誓するならば、汝

等もまた此等動物の姿の如くなる可し」と言はれるのである。此の發言は自己呪詛でこれは恰度猛獸や鰐魚などを使用してなす神判に、「若し眞に自分が罪人ならば、此處に齎された猛獸に害さるゝも厭ふところでない」と發言して動物神判を受けるのと同じな形態で、神判の場合の自己呪詛は、過去に犯した善惡行爲を發見し確定せんとするに用ひられ、誓盟の場合の自己呪詛は、未來に對する善惡行爲を保證せんとする點に重心があるのである。

斯く支那民族以外の誓盟の例に、牛犬を初めとして、種々な動物を適用してゐることを知り、此の誓盟が神判と深き關係を有するものであり、時には誓盟に於ける自己呪詛のみで、神判をすらなすことが出来ることを考へると、支那の古代社會に於いても、牛や犬などいふ動物が、被判人の罪科の有無を判定する爲めに使用されたことがあつたと見ても差支へばなからうし、そして狴犴とか牢獄とか或は告とかい

ふ文字は、それ等風習の反映してゐるものと見ても無理はなからう。

六

動物神判に起源を求めて、牢獄とか狴犴とか、或は告とかいふ文字を説明して來たが、實際上、吾々が知る範圍に於いて、牢獄や狴犴は神判を爲す處ではなく、罪人を收容して置く處であるから、神判をなす所から、罪人を收容する所にと、發展した過程が、矢張り合理的に説明されなければならない筈である。牢獄や狴犴の起原に就いては、人々の中には、罪過を犯した者が、一般人から輕蔑され、動物視され、牛馬を遇する如き冷遇を以て、彼等を牢閑・溷などに類する汚惡の屋舎に容れたので、旋て罪人を收容する所を、動物の屋舎に因んで、牢獄とか狴犴とか稱したと考へる者もあらうと思ふが、既に罪人なるや否やを決定するに、動物神判なるものの存在を肯定するな

らば、罪人を收容するといふことは、其後に來るものであるから、容疑者即ち被告を、牛小舎・豕小舎・犬小舎などに容れて *toe* したといふことが最初であり、動物は惡人に危害を加へるものだといふ觀念が誘導されて、罪人と決定した者を動物屋舎に容れるといふ慣習も生じ、從つて *prison* を意味する語に、動物に關係ある牢獄とか狴犴とかいふ文字を用ひるに至つたと見るのが妥當であると考へる。文明人の社會に於いては、動物神判などいふ慣習は既に痕跡も留めてゐないで、罪科の有無、行爲の正邪曲直を判定するに、法官は證據物件の集蒐にまつのであり、また罪人收容所として、動物園を使用する國などいふものもないのであるから、現代人の常識的判斷で、古代支那の牢獄や狴犴の有様を想像すると、*prison* に相應する文字として、動物關係の文字を使用してゐる點に、不可解の念を抱くであらうが、斯る文字の遺存してゐることが、事物の起源探求者に、必要な鍵を與へ

牢獄及び狴犴の起源に就いての臆説

て呉れるので、支那文字の妙味は其處にあると言はなければならぬ。

そこで、動物屋舎が、被判人を判定する神判所と、犯罪人を收容する所謂監獄との二様に使用されてゐたことを、文化程度の低級な民族に例をとりつゝ、其の中で動物 *prison* が、動物 *orddeal* より進展したのであつて、二者は思想的に連絡のあつたことを論述して見るとしよう。例へば、南史、扶南傳（卷七八）に、

又於城溝中養鰐魚、門外圈猛獸、有罪者輒次餵猛獸及鰐魚、魚獸不食爲無罪、三日乃放之。

とある文面などを見ると、扶南に於いては猛獸圈や、鰐魚潭が、神判所と、牢獄の二様に使用されたことがあつたらうと推定される。即ち「有罪者を猛獸鰐魚に餵はす」とある慣習の中には *punishment* の思想が胚胎し、「魚獸食はざれば無罪となす」とある思想の根柢には、神判の觀念が流れてゐるではないか。

南史、文身國傳(卷七九)に、

犯輕罪者別鞭杖、犯死罪則置猛獸食之、有枉則獸避而不食、經宿則赦之。

といふ記載がある。

此の文で見ると、輕罪者に對して死罪者が述べられ、其の死罪者を猛獸圈に置いて之を食はしむるといふならば、それは死刑囚を動物 prison に置くといふ思想慣習が、文身國に存在してゐたことが認められ、また有枉者即ち冤罪者が、誤つて罪人視され動物圈に容れ置かれた時、動物は避けて食はなすといふならば、而して其者は翌日赦され無罪と宣告されるならば、斯かる習慣の起源には、神判思想の存在が肯定されるので、動物圈が牢獄と神判所との兩様に使用された痕跡は、文身國傳にも見出されるのである。

此の南史に見える文身國は、實在的の國なりしや、將たまた虚構的所産の國なりしやは、此處に論ずる

ことは暫らく措くとし、縱しそれを虚構的な國としても、兎に角、文身國の風俗習慣として記されてゐるものは、此國の傳を虚構的に書き綴つた作者が、當時何れかの國のものとして見聞した爲めに生じたものと見られるから、間接的であつても、事實を反映してゐると推察して差支へはないと思ふ。

Batcheler, Ainu and Their Folklore (P. 287)に、

The barbarous hot water ordeal. A very large Cauldron, such as the Japanese use for boiling fish when they desire to extract the oil for lighting purposes, was procured; this was filled with cold water and placed over a blazing fire. As soon as the water was fairly warm the victim was put into it— as shown in the illustration. Here the person was compelled to remain till he or she, in the agonies of the moment, made a full confession. Such an ordeal

was never restored to, we are informed, unless the judge and people were pretty well assured of the person's guilt. This ordeal also constituted one mode of punishment.

といふ敘述があるが、これもまたアイヌ人間で、動物ではないが、boiling waterを、罪科の有無を判定する神判にも、罪人を罰する刑罰にも使用してゐる例であることが解る。

古事記、日本書紀によると、古代日本の社會には、火神判といふ風習が存在してゐたことが知られるが、同時に、既に決定した罪人を火刑に處するといふことをも實行してゐたので、其の點に關しては、既に余輩は「古代日本の火神判」といふ題で論述したので⁽¹⁷⁾茲には再び繰り返さないが、これなどは、矢張り動物ではないが、火といふ要素を ordeal と punishment の兩様に使用した例として参照されるものと思ふ。先きに南史、扶南國の例を引用して、其處に猛獸鰐

牢獄及び獐犴の起源に就いての臆説

魚の神判及び刑罰の慣習の存在したことを述べたが、其の外にも、亞細亞南方地方に居住した諸民族間には、動物神判や動物 punishment の習慣を持つてゐたものが多い。例へば、海語、暹羅の條には、象をして罪人を蹂殺せしめてゐる記載があり、諸蕃志、注輦國の條には、重刑者は斬殺されるか、象をして蹂殺せしむるかするといふ記載があり、⁽¹⁸⁾梁書、南史、唐書等の林邑の條には、同じく罪人をば、象をして蹂殺せしむるといふ記載があり、⁽¹⁹⁾Jolly氏の Crime and Punishment といふ論文には、Hindu の例として、其處では、重刑者は、燒殺されるか、若しくは象をして踐殺せしめられるといふ記載があるのは、動物 punishment の例であるが他方に於いてまた、上記の諸國で、刑罰に使用した此の象を、唐書の驪國の條には、神判に使用したといふ敘述があり、⁽²⁰⁾海槎餘錄の黎國の條にも神判に使用したと考へられる敘述がある⁽²¹⁾のは動物 ordeal の例である。

いま、此等の例證を検討すると、暹羅、注輦、林邑等の國々で、重罪人處刑に象を使用したのは、punishmentであるが、驃や黎などの國々で、象をordealにも使用してゐるのを見ると、刑罰に使用した記録しか持たない暹羅、注輦、林邑などの國々でも、驃や黎などの如く、矢張り ordeal に用ひたこともあつたらうと推定されるし、反對に驃や黎などの如く、ordeal に適用したといふ記載のみを持つ國々でも、暹羅、注輦、林邑などのやうに、刑罰にも用ひたことがあつたらうと推論される。

前掲諸例によつて解る如く、古代の文明民族や、未開民族間に於いては、猛獸鰐魚や、boiling water や熱火を、ordeal に使用すると同時に、punishment の一種としても使用することが普通であつたとすれば、古代の支那人が、牢獄や拷問を兩様に適用したとしても、人類心理の共通の點から考へて、何等差支へはないのである。而して ordeal に依つて罪科の有

無を決定するのであるから、罪人と決定した者に科する punishment と ordeal との施行順序を言ふならば、ordear は punishment に先行するのが當然である、支那の場合、縦し牢獄拷問を神判と刑罰の兩様に使用された記載があるとしても、神判に使用されたのが先きで、所謂 prison の意に使用されたのは、發展過程上二段の變化と見る方が妥當であらう。

此の概念を裏書きするものは、先きに掲げた荀子、宥坐篇の「獄犴不治、不可刑也」といふ句である。彼れは其の當時既に明瞭に、獄犴と刑罰との觀念を區別して、獄犴を刑罰に先行する行爲として居るのである。此の句で「獄犴不治」とあるのは罪の有無を正しく判定する神判がなされなくてはといふ意であり、「不可刑也」とあるのは、刑罰を科することが出来ないといふのであるから、此の句は、獄犴は最初から、監獄として、或は牢獄として、或は刑務所として、使用されたのではなく、寧ろ神判所として使用され

たのであることを證明するに有力な參考資料の文獻と見られる。

註

- (1) 東洋學報、拙稿、「古代支那に於ける神判の「形式」」(第一六卷、三號)。
- (2) 「支那法の起源」と題して嘗て早稻田東洋史談話會に於いて講演したことがあるが、其後幾分か當時の研究に訂正を加へなければならぬやうになつたので、改めて起稿し發表する考へである。
- (3) 東洋學報、拙稿、「古代支那に於ける神判の「形式」」(第一六卷、三號)。
- (4) 梁書、扶南の條(卷五四)。劉敬叔、異苑扶南の條(卷三)。趙汝适、諸蕃志、占城の條。周致中、異域志、占城の條。明史、占城の條(卷三二四)。黃衷、海語、暹羅の條等々を參照。
- (5) 同上。
- (6) 梁書、林邑傳(卷五四)。諸蕃志、注贛國の條。海語、暹羅の條。唐書、驪國の條(卷二二八)。朝駕、朝野僉載、安南の條等々參照。
- (7) 墨子、明鬼篇に、昔者齊莊君之臣有所謂王里國・中里微、此二者訟三年而獄不斷、齊君由謹殺之、恐不幸、猶讎釋之、恐失有罪、乃使二人共一羊盟齊之神社、二子許諾、於是涸池、握羊而灑其血、讀王里國之辭、既已終矣、讀中里微之辭、末半也、羊起而觸之、折其脚、祇神之而藥之、燬之盟所、當是時、齊人從者莫不見、遠者莫不聞、著在齊之春秋。とある。史苑、拙稿、「盟の形式より觀たる古代支那の羊神判」(第一一卷、第三・四號)參照。
- (8) 註(7)參照。
- (9) 史苑、拙稿、「盟の形式より見たる古代支那の羊神判」(第一一卷、第三、第四號)。
- (10) 詩經、生民篇。及び史記、周本紀參照。
- (11) 註(7)參照。
- (12) 說文、薦の條。王充、論衡、吉驗篇(卷一七)參照。其外にも漢書晉書。漢官儀。神異經。異物志。述異記等に夫れ夫れ解字に就いての記載がある。
- (13) 王充、論衡、吉驗篇(卷一七)。魏略(三國志、扶餘國の註に引用されたもの)參照。
- (14) 東洋思潮、拙稿、「古代支那人の民間信仰」。
- (15) 史苑、拙稿、「古代日本の神判に就いて」(第四卷、第一號)。
- (16) 註(5)參照。
- (17) 註(6)參照。
- (18) 註(6)參照。
- (19) Hastings, Encyclopedia of Religion and Ethics Vol. 4. p. 284.

牢獄及び狴犴の起源に就いての臆説

(20) 註(6)参照。

(21) 明顧昉、海槎餘錄、黎の條。

猛獸及び毒蟲神判の痕跡

亞細亞南方の國々の中で林邑、暹羅、扶南等では、猛獸、鰐魚の神判が實施されてゐたし、占城、安南等でもまた鰐魚や虎狼や巨象などが神判に使用されてゐたことは、それ等の國々の風俗習慣を述した文獻に例證を求むることが出来るが、然らば支那本土に於いて、斯くの如き鰐魚、巨象、猛獸などを適用してなした神判の文字を、支那の古典籍に見出すことが可能であるだらうか。

鰐魚や巨象は熱帶亞熱帶產の動物で、支那文明發祥の黃河流域地方は、氣候風土の關係から考察しても、それ等動物の棲息地域であつたとは認められなく、それが棲息動物でないならば、古代の支那人はそれを民間信仰の對象とする筈もなく、従つて古典籍

などにも鰐魚神判や、巨象神判の例を求め得られないのが當然であると思ふが、之れに反して猛獸の居住地域は必ずしも熱帶地方と限られず、支那内地に於いても古來より熊虎などは、民間信仰の對象となり、英雄傳説物語の中に書き綴られてゐる程であるから、此の猛獸を以てする神判は、亞細亞南方諸民族間に見られるやうに、古代の支那人間にも行はれてゐたのであらう。

詩經、小雅、巷伯の條に、

驕人好々、勞人草々、蒼天蒼天、視彼驕人、矜此勞人、彼譖人者誰適與謀、取彼譖人者投畀豺虎、豺虎不食、投畀有北、有北不受、投畀有吳。

といふ句がある。思ふに此の句中には、當時行はれてゐた猛獸神判といふ慣習の痕跡が認められるのであるまいか。

いま、之れを周の古傳説、后稷誕生のそれと對比討論して見ると、周のは、生兒后稷の天資の偉大を、

せん爲めに、先づそれを馬牛に與へて居るが、此處では、諧人即ち不信なる者を取つて豺虎に投界へるといふことになつてゐる。それで、これが人を誣ふる者、不信なる者、即ち諧人なる者の行爲の善惡をさぐる思想慣習の表現されてゐる文獻と見られるならば、それは一種の訴訟行爲、裁判行爲の名残の文字と觀ぜられるのである。

而して后稷物語では、后稷は最初馬牛に與へられて居り、馬牛が之れを食らはなかつたので、次ぎに林中に置かれてゐるが、茲では、豺虎に投界へ、若し豺虎が食らはなかつたなら、それを有北に投界へるといふことになつてゐる。林中に於いて救助された后稷は、更に氷上に置かれてゐるが、茲では有北に於いて受け入れられなかつた諧人は、有吳に投界へられるといふことになつて居る。

后稷傳記に現はれてゐる動物は馬牛であり、何故に此等馬牛の如き家畜が人物と關與させられて

牢獄及び糞杆の起源に就いての臆説

ゐるかと言へば、后稷その人が穀物名である點からも考へられるやうに、周の始祖傳説は、農耕を業としてゐた民族間で創作された傳説であり、農耕には馬牛は頗る重用なる役割を演ずるものであるから、自然とそれ等馬牛が靈視され崇拜されることになり、從つて人物などの場合にも、靈視された馬牛が適用されるに至つたのであらう。處が、詩經巷伯の記載は、諧人に關するもので、それが諧人の有罪無罪を判定するものならば、刑罰思想反映の記載であるから、他民族の例の如く、斯かる場合猛獸が使用されるのは寧ろ當然で、此處に豺虎が使用されてゐるのは最も相應はしいと考へられる。

それで猛獸が神判に用ひられるには、其の猛獸が崇拜され、靈視された結果であることは勿論で、既に余輩は、左傳、宣公五年の條に、

初若敖娶於邳、生鬬伯比、若敖卒、從其母畜於邳、淫於邳子之女、生子文焉、邳夫人使弃諸夢中、虎

乳之。

とある文に注意して、之れは虎崇拜、虎神判などいふ思想の反映せるものであることを説いたことがあり、また史記の大宛傳及び魏書の高車傳には狼に關した記載があつて、それ等の記載中に出て来る狼は何れもその民族間では靈視されて信仰の對象となつてゐたのであらうことを論じたのであるが、詩經巷伯の中に出て来る豺虎も、大宛や高車などで虎狼が神視されたと同様に靈視されてゐたから、諸人を^{ごま}するに適用されるに至つたと見て差支へはなからう。

史記、項羽本紀(卷七)に、

張良陳平説曰、漢有天下大半、而諸侯皆附之、楚兵罷食盡、此天亡楚之時也、不如因其機而遂取之、今釋弗擊、此所謂養虎自遺患也。

といふ記事があり、此處に養虎といふ語が見えるが、古代支那人の或者は、恰もアイヌ人が熊を飼養する

如く、虎を養ひ育てるといふことを爲したと思はれる。

史記、張釋之・馮唐列傳(卷一〇二)に、

文帝乃拜釋之爲謁者僕射、釋之從行登虎圈、上問上林尉諸禽獸簿。

といふ記載があり、史記、封禪書(卷二八)に、

其西則唐中數十里虎圈。

とあり、註に括地志を引用して、

括地志云、虎圈天在長安城中西偏也。

と言つて居り、封禪書や、括地志の文から判斷すると、虎圈は單なる地名としか考へられないが、文帝が、上林尉に諸禽獸の計簿に就いて問うて居る張釋之傳の文から推斷すると、此の虎圈は養虎圈であつた處に其の起源があり、地名としての虎圈は、昔し虎圈のあつたのに因んで生じたと思なければならなからう。

論語、季氏篇に、

虎兇出於桺、龜玉毀於櫝中、是誰之過歟。

といふ文があるが、これなども、桺は檻であり、虎兇が其の檻より遁出するといふならば、當時虎兇を檻中に養つてゐた慣習が無ければ斯かる記述も生じない筈である。だから漢時文帝が虎圈に登つて諸禽獸の簿を上林尉に訊ねた折の虎圈に、虎が養育されてゐたとするならば、此の風習は論語の製作された頃既に存在してゐた慣習であることが文獻の上から證明されるのである。

此の虎圈に類似の地名に虎牢といふのが、今の河南、汜水縣で、漢時此處に成臯縣を置いたので此の虎牢はまた成臯とも言はれるが、虎牢といふ地名の起源は恐らく虎の牢があつたので有名となり、遂に地名として残つたであらう。

穆天子傳(卷五)に、

有虎在乎葭中、天子將至、七萃之士、高奔戎請生捕虎必全之、乃生捕虎而獻之、天子命之爲桺、而

畜之東虞、是爲虎牢。

とある物語によつて見ると、虎牢は最初虎の檻であつたことが察せられる。而して左傳、僖公四年の條に、

齊侯說與之虎牢。

とある虎牢は地名としては認されるから、此の地名は、前段で推定したやうに虎の檻のあつたに因んで虎牢といふ名稱が附せられるに至つたと見て差し支へはなからう。

斯くの如く、支那の古文獻により、虎圈、虎牢の存在が肯定され、それが牛牢、馬閑など同一觀念のもとに統一されることが許されるならば、牛牢や馬閑を *animal ordeal* に適用すると同様に、虎圈・虎牢をも *animal ordeal* に使用することもあり得る筈で、先きに掲げた詩經、小雅の諍人を豺虎に投界へて食はしめるといふ文が、其の例として考察される譯である。

風俗通、(卷八)に、

黃帝書、上古時有神荼・鬱壘昆弟二人、性能執鬼、
度朔山上有桃樹、下常簡閱百鬼、鬼無道理者、神
荼與鬱壘、縛以葦索、執以飼虎。

といふ記載があり、これは民間的信仰としての鬼退
治物語であるが、鬱壘と神荼とが葦索を以て邪鬼を
執へて虎を飼ふとなつてゐるのは、虎は他の獸類を
捕食する貪殘極まりない性質を有つてゐるので、惡
鬼に對しても其の貪殘性を發揮するものと考へて、
人々は捕縛した邪鬼を其の虎に投げて食はしむるこ
とによつて、完全に惡鬼を退治することが出來ると
思つたから、かくの如き物語が生ずるに至つたので
あらう。然し此の物語が生じた頃には、實際に虎圈
や虎牢が存在してゐたので、虎に投げ與へて邪鬼を
退治するといふ觀念が湧いて來たのであらうし、ま
た、虎が惡鬼を退治するといふ思想は、虎が惡人を判
定することが出來るといふ思想と密接な關係がある

ので、此の民間信仰の物語の中には、虎神判の要素も
伏在してゐると思惟することが出來るのである。

虎牢に對して、支那には蟲牢の地名がある。左傳、
襄公十八年の條に、

蕭子馮・公子格、率銳師、侵費滑胥靡、獻于雍梁、右
回梅山、侵鄭東北、至蟲牢而反。

とある文に、蟲牢に至つて反すといふ如きはそれ
である。

此の蟲牢といふ地名は、河南省、封丘縣に残つてゐ
るのであるが、此の名稱の起源は、前に説明した虎圈
とか虎牢と俟しく、恐らく最初は蟲を入れて置いた
小舎があり、それが頗る有名になつた處から、其の名
稱に蟲牢と附して後世まで傳承され來つたと見られ
る。

然らば、何故に地名として残る程有名になる蟲小
舎即ち蟲牢が、古代に存在してゐたのであらうか、牢
の字が使用されてゐる點から考へて、また牢が牢獄

とか動物神判所とかの意味を持つものと考へて、蟲牢は、毒蟲を適用してなす毒蟲神判所、または毒蟲牢獄ではなかつたらうかと思はれる。毒蟲神判所とすれば、被告を其の蟲牢に入れ、毒蟲が其の被告を螫するか否かによつて被告の罪の有無を判定したのであり、毒蟲牢獄とすれば、一旦決定した罪人を刑に處する方法として、毒蟲刑を科したものと思はれる。それ故に單に蟲舎と稱せずに、牢獄の牢をとつて蟲牢と呼んだのであらう。

西藏の風俗を記載した、盛繩祖の入藏程站に、

有蝸子洞、犯死罪者縛至洞令食之。

といふ記事があるが、これなどは、明らかに死刑囚を蝸子の棲息する洞か、或は特に蝸子を飼養してある洞かに入れるのであるから、蝸刑とでも稱す可き punishment が、當時の西藏に行はれてゐたことを示してゐるのである。此の記載は、支那に於ける蟲牢の觀念に、解釋上光明を與へるもので、其の蟲牢は

最初、毒蟲神判所か、毒蟲牢獄かであつたらうといふ推定をしたのも、無稽の推定でなかつたことが解るであらう。

毒ある蟲類を神判に使用した例は倭國の昔の風習にも見られる。その引用文は割愛するとして、北史や隋書の倭國傳には、倭人の風習として、罪の判定をなす場合の一方法として、瓮中に毒蛇を置き、被告をして、瓮中を探らしめ、毒蛇が被告を螫刺するや否やによつて、罪の有無、事の是非曲直を判定したのであることが書かれてゐるが、これは明白に毒蛇神判である。而して蛇や蝸を蟲類の部に入れて解釋しても差支へはないのは、既に蛇も蝸も其の文字に蟲偏のあること注意すべきで、現に爬蟲類に分類されてゐるのであるから、支那の蟲牢の蟲は蝸や毒蛇の牢と見ても間違ひではなからうと思はれる。

北史や隋書の倭國傳に記載されてゐるやうな毒蛇神判の例は、古事記や日本書記などいふ古典には見

出されないで、若し北史、隋書の倭國傳なるものが遺存してゐなかつたら、古代の日本に毒蛇神判の風習が存在してゐたことを知ることは出来なかつた

が、併し茲に大國主命が素神の爲めに、蛇の室屋、吳公の室屋、蜂の室屋等に入れられた記述のあるのは注意すべき記述である。此の室屋に入れられた以外に、素尊は、鳴鏑を大野の中に射入れ、大國主命をして其の矢を採取せしめて居るのであつて、物語全體が結婚に關連して居り、無事に鳴鏑の矢を採取し來り、或は難なく蛇、吳公、蜂の室屋を通過し來るならば、素尊は女須世理毘賣を大國主命に娶はせんと御心であつたのであるから、此等の方法は一種の人物 *character* であると思はれる。さすれば、蛇室屋、吳公室屋、蜂室屋などは何れも、毒蟲神判、毒蛇神判の形式とも考へられるのである。それ故に北史や隋書の倭國傳以外に、毒蛇神判の記載は我が國の文獻にはないといふ片付けて仕舞ふ譯に行かないので、自分は素尊

と大國主命の物語に見える蛇室屋のそれは、當時の日本に蛇神判といふことがあつたので、その習慣が物語に反映してゐるのであると考へてゐる。

先に支那の蟲牢の蟲に就いて、毒蛇や蝎子などを入れて置いた牢だと見ても差支へはなからうと言つたが、若し倭國の古代史に見る如く吳公や蜂などいふ毒蟲を以て人物 *person* に使用したことが是認されるならば、蟲牢には蝎子や毒蛇は勿論のこと、或は吳公や蜂などいふ蟲類の毒あるものをも飼養してゐたかも知れないと推測されることになるのである。

次に支那に於いて、亂暴なる爲政者が、無辜の生民を壓迫し誅求することを、毒蟲の蜂蛇に例へてゐるので、例へば、宋書、(卷九五)に、

侵暴中國、使長安爲豺狼之墟、鄴洛爲蜂蛇之藪、縱毒生民云々。

とある如きは夫れであるが、これによつて見ても、猛獸の豺狼に對して、毒蟲の蜂蛇などが考慮に入れら

れてゐることは明白で、蜂蛇と對して用ひられる蛇が事の *story* に役立つなら、蜂もまた曲直の判定に利用されたことであらう。

支那の古代社會に於いては、誓盟をなす方法として種々なものがあり、白馬を刑して爲したことの文獻に見えてゐるのは其の一つである、また河伯を祭る時に白馬を沈してそれを祭つたことも典籍に散見する處であるが、後世の地名として或は白馬縣であるとか、或は白馬津とかいふものの名稱の發生起源は、恐らく白馬を以てした誓盟や祭祠の行はれたといふ點で有名になつたので、其の名を後々迄傳承されてゐるものであらうと自分は考へてゐるが、これと同様な思想傾向で、虎牢、虎圈などの地名は、虎神判の行はれた處、虎牢獄の存在してゐる處だつた故に虎牢・虎圈の名稱が附され、蟲牢の地名は、毒蟲神判の行はれた處、或は毒蟲牢獄の存在してゐた處だつた故に、それに因んで 蟲牢の名前が地名として保

存されるに至つたのであらうと思はれる。

註

- (1) 本文の註(4)、(5)、(6)参照。
- (2) 東洋學報、拙稿、「古代支那に於ける神判の一形式」(第一六卷、三號)。及び東洋思潮、拙稿、「古代支那の民間信仰」。
- (3) 同上。
- (4) Batchelor: *The Ainu and Their Folk Lore*. p. 483.
- (5) 北史(卷九四)。及び隋書(卷八一)参照。
- (6) 古事記、大國主命神話の條。
- (7) 從來、學者によつて、此の蛇、吳公、及び蜂の室屋の説話を、毒蟲神判風習が反映してゐるといふ風に解釋されたことを聞かないが、自分は此の記載を以て、北史や隨書の倭國傳に見える毒蛇神判の記錄に對して、神代史に見る唯一の毒蟲神判の例と考へるものである。此のことに就いては、何れ研究を發表することとする。
- (8) 戰國策、趙肅侯の條、史記、蘇秦傳參照。
- (9) 史記、封禪書(卷二八)に、自臨塞決河留二日、沈祠而去。とあり、註文に、沈白馬祭河決。と見えてゐる如きはその一つであり、史記(卷六)秦始皇本記に、二世乃齋於望夷宮、欲祠涇沈四白馬。とある如きもまた其の例である。